

海陽町の板碑

考古班（徳島考古学研究グループ）

岡山真知子^{1*} 西本 沙織² 小林 勝美³ 三宅 良明² 飯田 悠衣² 中川 尚⁴
福田 宰大⁵

要旨：海陽町の板碑は、砂岩で造られ、定型化した板碑が存在しないという特徴をもつ。今回、調査をしたのは7基の板碑であるが、うち紀年銘板碑を4基確認できた。宍喰浦の願行寺にある山越弥陀画像板碑は、天正18（1590）年という徳島県で最も新しい紀年銘をもつ板碑である。また、觀応元（1350）年と明徳元（1390）年という南北朝期の板碑が2基あるのも特徴である。今回の調査で、海部・芝の地蔵寺、宍喰・塩深の大山神社奉納品の地蔵画像板碑、海部字吉田の城満寺の地蔵石碑が存在するなど地蔵画像が多いのが特徴と認識できた。

キーワード：阿波型板碑、地蔵画像板碑、山越弥陀画像板碑、田所市太、笠井藍水

1. はじめに

板碑とは、中世に造立された石製の卒塔婆のこととで、分布の中心地の一つに阿波国があるという独特の考古遺物である。海陽町の板碑の調査は、田所市太や笠井藍水の研究から始まる。

田所市太が『考古学雑誌』に「阿波南方の板碑」¹⁾として、徳島県南部の板碑を紹介する中で、当時宍喰村の塩深の応永四年の板碑と古目の大日種子板碑を紹介している。また、「阿波國海部郡宍喰の板碑」の中で、前出の板碑以外に角坂坂田邸にある阿弥陀三尊板碑を紹介し、「觀応元年六月廿日と刻したのが二つに折れて居る」²⁾とある。さらに、「宍喰方面の板碑は吉野川流域の板碑と違って形式化していない、砂岩で造られている」³⁾と指摘している。

笠井藍水は、『海部郡誌』（1927）に、石碑として4基を紹介し、板碑として願行寺の板碑を紹介している。さらに、1949年には『下灘郷土読本』の中に中世の石仏として地蔵寺の地蔵画像板碑を紹介している。

『海部郡川西村史』（1919）に地蔵寺の地蔵画像板碑が紹介されたのを皮切りに、その後、町史が刊行

され、板碑も記述されるようになった。『宍喰町誌』（1986）には、『海部郡誌』と同じく石碑として4基、板碑として1基が紹介されている。『海部町史』には、地蔵寺の明徳逆修碑拓本と城満寺の石仏が紹介されている。『海南町史』上巻には城満寺の石仏が紹介されている。

阿波学会の調査としては、宍喰町と海部町で行われており、海部町では、阿波学会紀要第33号に郷土班が「石造文化財・文書類調査」として城満寺の線刻伝地蔵菩薩立像と地蔵寺の地蔵菩薩画像板碑の調査報告を行っている⁴⁾。

2. 海陽町における板碑の調査

文献に紹介されている石仏や板碑を調査したが、今回は古目の石碑は板碑とは考え難いということで、調査対象とはしなかった。また、文献には全く出てこなかった大山神社奉納品の地蔵画像板碑（現在宍喰図書館に保管）を調査対象に加えた。今回の調査は6カ所、7基の板碑の実測調査・拓本・写真撮影を行った。その結果は表1・図1にまとめた。

1) 塩深字ヒタイの板碑（図2-1・2）

宍喰浦から西に行くと、塩深の集落がある。川を

1 徳島市南末広町 2 徳島市教育委員会社会教育課

3 小松島市江田町

4 徳島県教育委員会

5 徳島市八万南小学校

* 〒770-0865 徳島市南末広町4-31-901

表1 海陽町の板碑一覧（長さ・幅・厚さの単位はcm, 番号は図1に同じ）

No	名称	所在地	高さ	幅	厚さ	種子	銘文	石材
1	ヒタイ1	海陽町塩深字ヒタイ共葬墓地	169	27	7	阿弥陀三尊種子	1)	砂岩
2	ヒタイ2	海陽町塩深字ヒタイ共葬墓地	115.4	17	6.2	なし		砂岩
3	角坂	海陽町角坂字天神後3-1 坂田博紀氏宅	122	44.4	14.6	阿弥陀三尊	觀應元年六月廿日	砂岩
4	山越弥陀	海陽町宍喰浦 願行寺	125	75	9	阿弥陀画像	2)	砂岩
5	地蔵画像	宍喰塩深字尾鼻49 大山神社奉納品 現在宍喰図書館所蔵	37.1	15.7	4.3	地蔵画像		砂岩
6	地蔵寺	海陽町芝字居内60-1 地蔵寺境内	180	36.7	11.8	地蔵画像	3)	砂岩
7	城満寺	海陽町吉田字西沢51番地 城満寺	34.2	14	7.8	地蔵画像	4)	砂岩

1) 宋術善故實學妙空 右意趣者為一積講衆 道安道實實圓□正 逆修□眼功德故也 道□道忍同金道德 應永十四歲二月十三日 □□妙金□□妙金道性妙姓 願主等敬白

2) 筆阿州 宮昨長福寺之内 栄傳作也 宮昨 野中助兵衛夫婦 為奉納大 妙典經六十六部 供養良林壽宗禪定衛門逆修善根也 為奉真詫法華妙典經一千部 権大僧都 省朝 旦那也 為奉納大 妙典經六十六部 供養妙貞逆修善根也 乃至 法界平等利益 天正十八年二月十五日

3) 右志者為逆修 結衆 明德元年十月日 奉 造立 供養 各々敬白

4) 建武元年（笠井藍水説）



図1 海陽町における板碑の所在（番号は表1に同じ, 地理院地図で作成）

渡って、集落の南にある小丘陵に墓地が造られている。共葬墓地という。この墓地の中腹の西端に祠がある。この祠の中に2基の板碑が保管されていた。

今回の調査では地元の塩深共葬墓地管理委員会の方にお世話をいただき、祠の中から取り出して調査をした。すると、3基の板碑があったが、1基は2つに割れており、2基と判明した。ところが、もう1基は未製品であり、完成品は1基であった。

完成品の1基（図2-1）は、長さ169cm、幅27cm、厚さ7cmを測る阿弥陀三尊種子板碑である。中央で2つに割れているが、砂岩製で、不定形で二線・枠線はない。銘文が長々と書かれている。「宋術善故實學妙空 右意趣者為一積講衆 道安道實實圓□正逆修□眼功德故也 道□道忍同金道德 應永十四歳二月十三日 □□妙金□□妙金道性妙姓 願主等敬白」である。「應永十四歳」は、1407年である。

未製品の1基（図2-2）は、長さ115.4cm、幅17cm、厚さ6.2cmを測る。砂岩製で、未製品のため種子も描かれていません。

2) 角坂の板碑（図3-3）

角坂字天神後3-1の坂田博紀氏宅の裏に位置する板碑で、町指定文化財である。長さ122cm、幅44.4cm、厚さ14.6cmを測る阿弥陀三尊種子板碑である。砂岩製で、「觀応元年六月二十日」の銘文があり、1350年につくられた。『宍喰町誌』には、「2個に切断せり。高サ一・八メートル」⁵⁾とあり、発見されたときは、2つに切断されており、1.8mの大きさだったと考えられる。

3) 山越弥陀の板碑（図3-4）

宍喰浦の願行寺にある阿弥陀画像板碑である。長さ125cm、幅75cm、厚さ9cmを測る阿弥陀三尊種子板碑である。砂岩製で、不定形で二線・枠線はない。銘文が長々と書かれている。「筆阿州 宍昨長福寺之内 栄傳作也 宍昨 野中助兵衛夫婦為奉納大妙典經六十六部 供養良林寿宗禪定衛門逆修善根也 為奉真諦法華妙典經一千部 権大僧都宥朝旦那也 為奉納大妙典經六十六部 供養妙貞逆修善根也 乃至法界平等利益 天正十八年二月十五日」であり、天正18（1590）年につくられた。阿波型板碑では、最も新しい板碑である。今回の調査は、実測のみとした。拓本については願行寺で保管されていた拓本を写真で撮影して利用した。

4) 大山神社奉納品の地蔵画像板碑（図5-5）

宍喰図書館に収蔵されている大山神社奉納品の中に地蔵画像板碑がある、この板碑は、長さ37.1cm、

幅15.7cm、厚さ4.3cmを測る地蔵画像板碑である。砂岩製であるが、おそらく竹ヶ島産のものと考えられる。

5) 地蔵寺の地蔵画像板碑（図4-6）

海部芝の地蔵寺境内の祠の中に建てられている。下に埋め込まれており、上半部を欠くので原寸はわからないが、現状では長さ180cm、幅36.7cm、厚さ11.8cmを測る地蔵画像板碑である。銘文として「右志者為逆修 結衆 明徳元年十月日 奉 造立 供養 各々敬白」とあり、明徳元年（1390）の造立である。

笠井1949には、「此碑はかつて多良村の用水の石橋にせられて居ったが、『芝の地蔵寺へいにたいいにたい』と村人に夢告げがあり、翌日裏を見れば地蔵顔であったから直に此所へ戻したと云う」⁶⁾との記述がある。『海部郡史』にも同様の記述がある。

6) 城満寺の地蔵（図5-7）

海部吉田にある城満寺に保存されている地蔵である。長さ34.2cm、幅14cm、厚さ7.83cmを測る『海部町史』によると、「明治四十四年七月二十五日、故歌長太郎が開墾中発掘した」⁷⁾とあり、「笠井藍水氏の鑑定では足利時代上期のものということである。おそらく城満寺の境内にあった墓碑が、天正の兵火に焼かれて地下に埋もれていたものであろう」⁸⁾と書かれている。銘文がないので、断定はできないが、板碑と同年代の室町時代の範疇に入ると考えられる。なお、このタイプの石仏が高知県などで多く見られることもあり、このタイプの石仏については、考察2)で詳述する。

これが、当時の信仰との関係を示すものか、今後の課題としたい。

3.まとめ

1) 板碑の種類

海陽町の板碑を標識別にグラフにしたのが図6である。これを見ると、一般的に阿波型板碑は阿弥陀三尊種子が2/3くらいを占めるのに対して、海陽町では1/3と約半分である。それに対して、地蔵画像板碑が1/2と高率を占める。海陽町板碑の特色である。

2) 板碑の造立年代

紀年銘板碑が4基あり、大きく前半期の3基と終末の2期に分けられる。前半期は、最も古いのが觀応元（1350）年の角坂の阿弥陀三尊種子板碑、次いで明徳元（1390）年の海部芝の地蔵寺の地蔵画像板

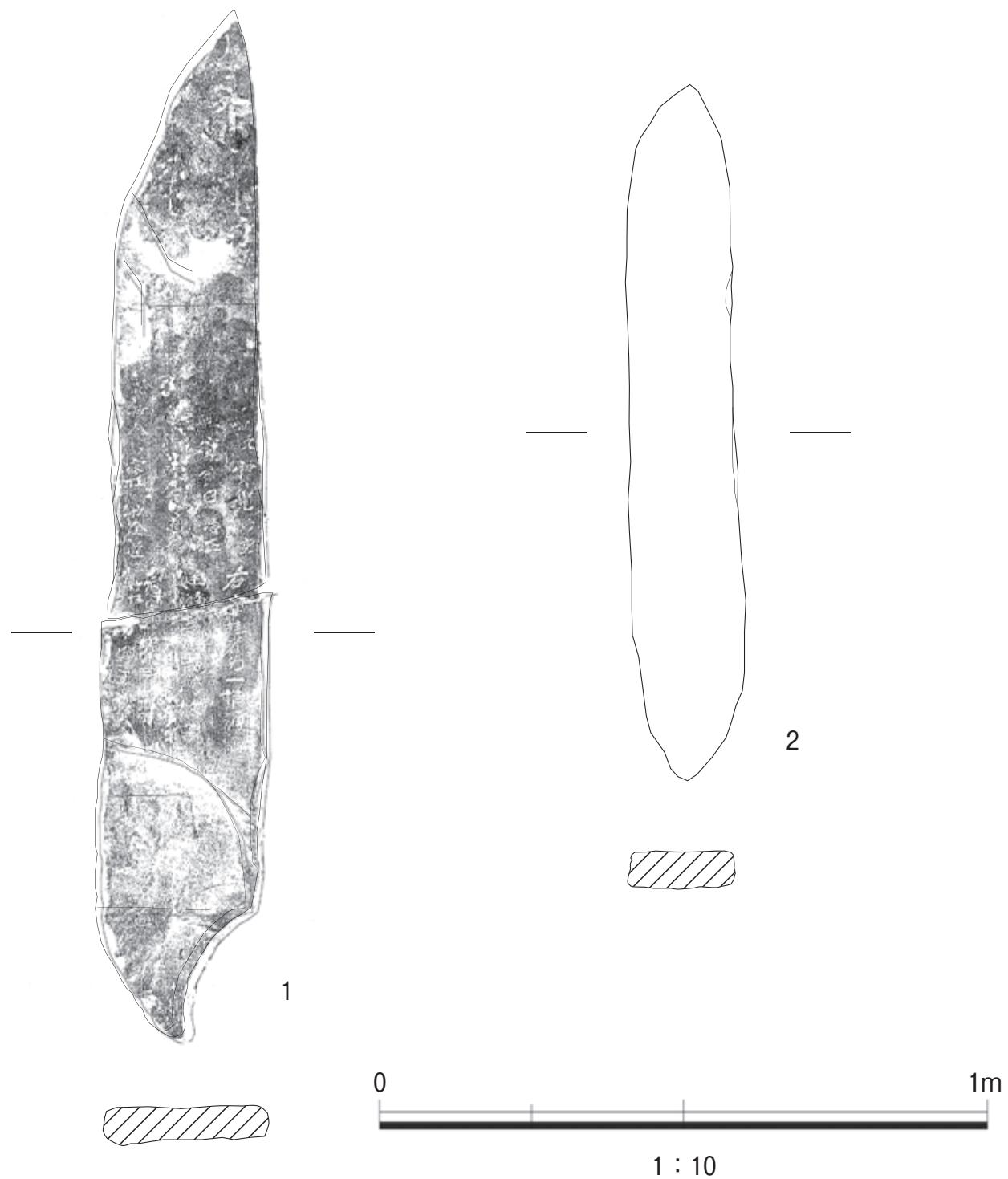


図2 海陽町板碑実測図1 (1:10, 番号は表に同じ)

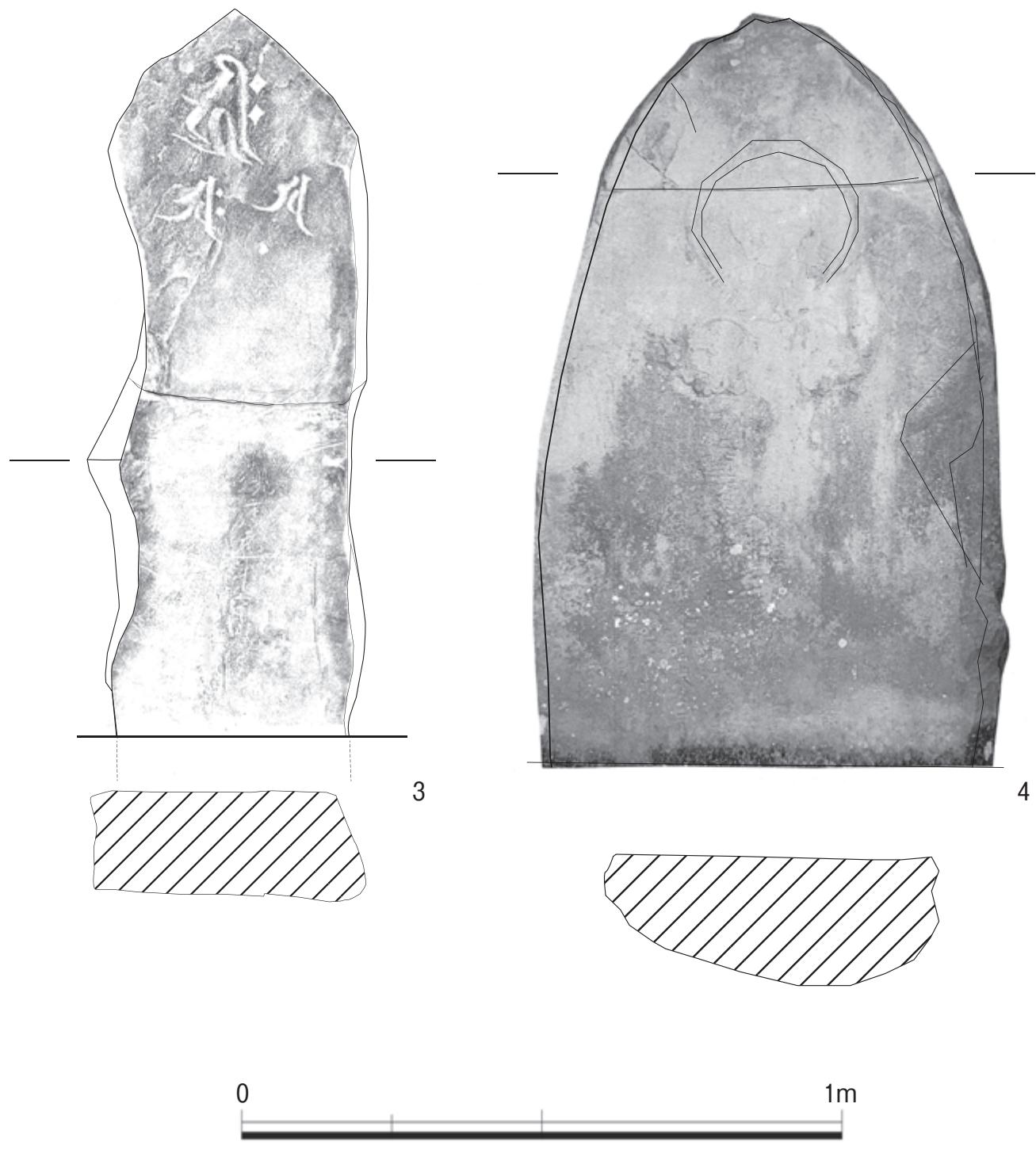


図3 海陽町板碑実測図2 (1:10, 番号は表に同じ)

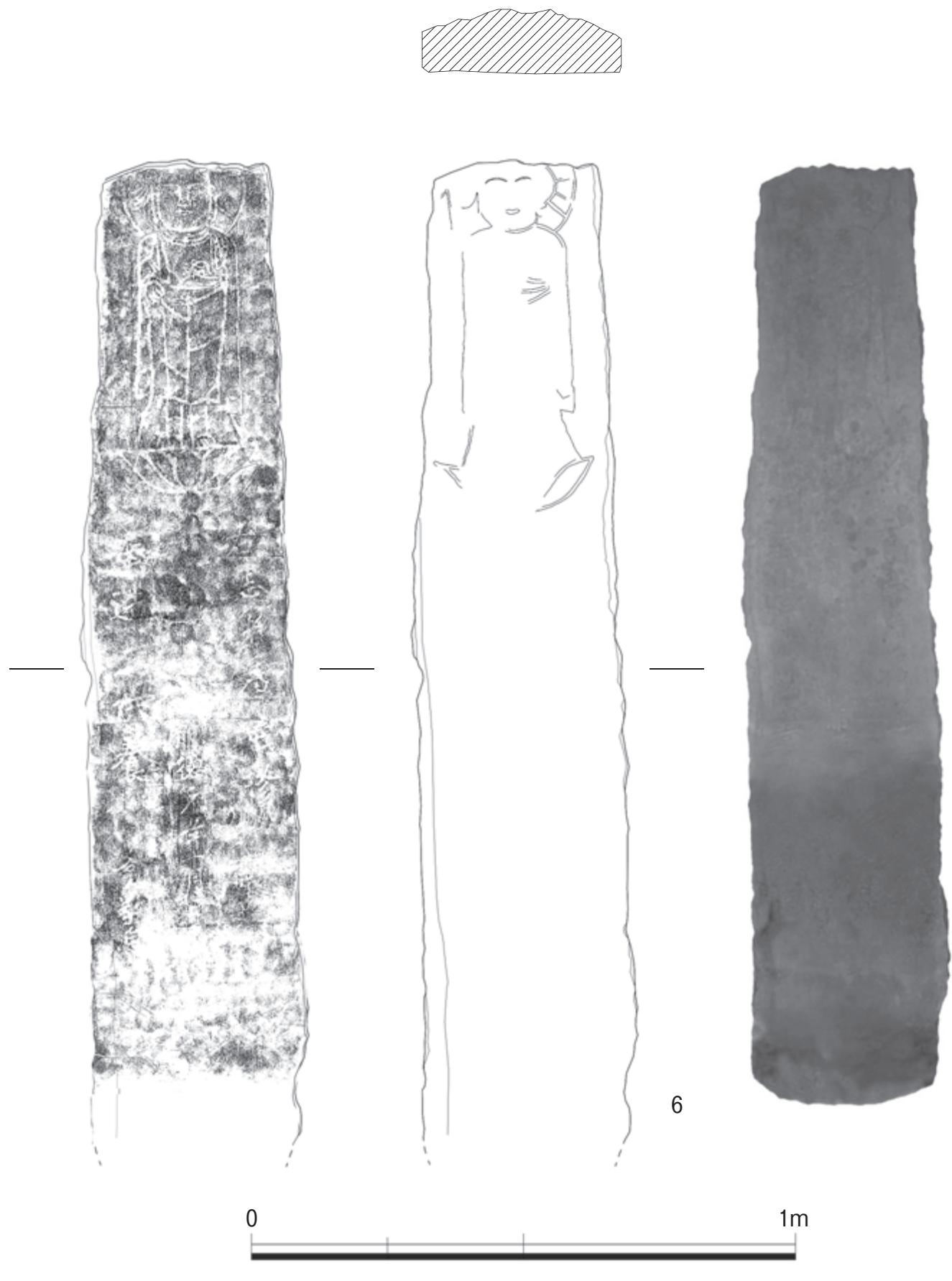


図4 海陽町板碑実測図3 (1 : 10, 番号は表に同じ)

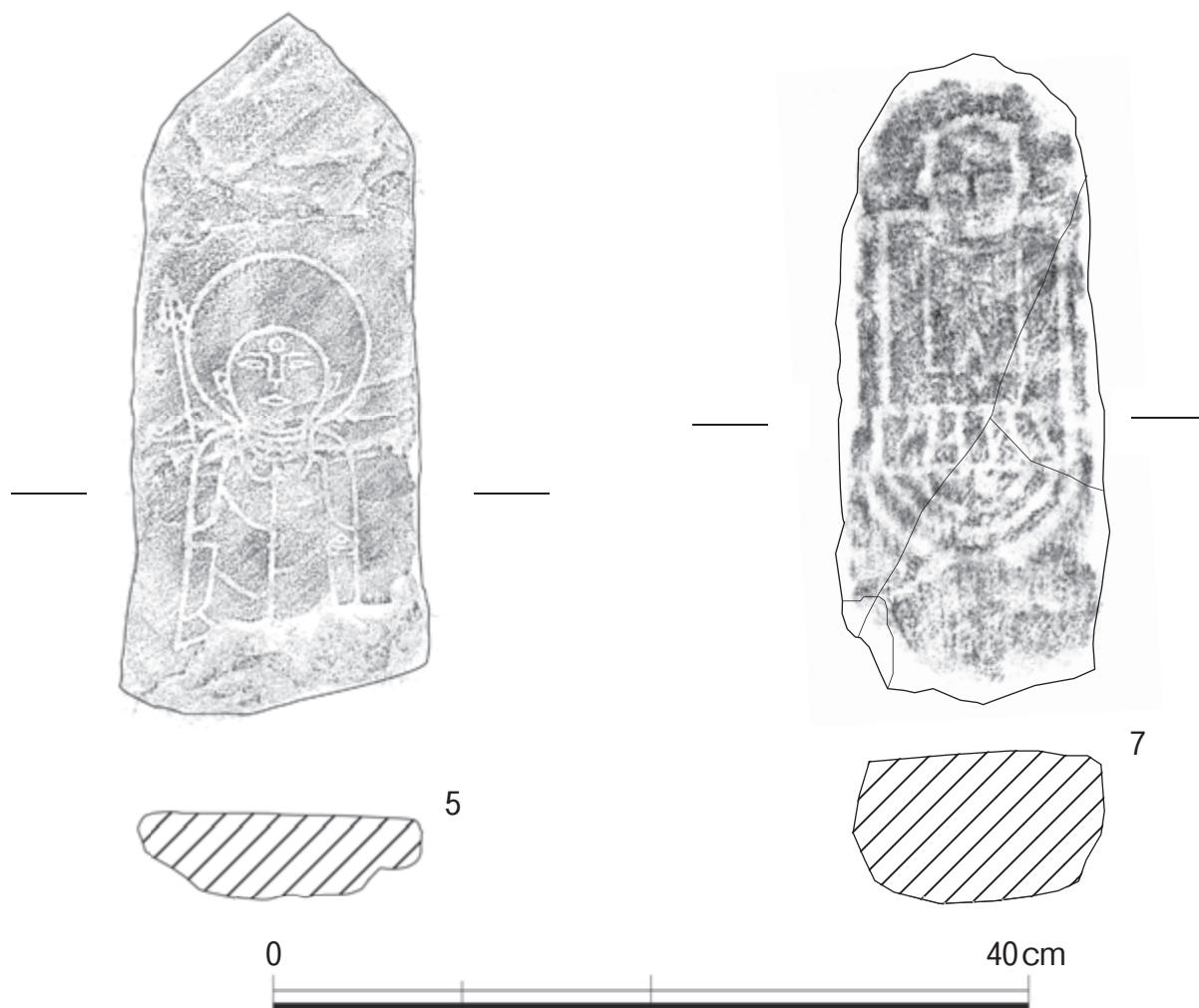


図5 海陽町板碑実測図4 (1:4, 番号は表に同じ)

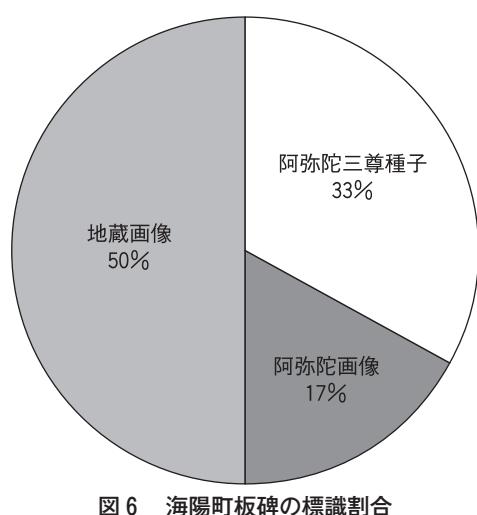


図6 海陽町板碑の標識割合

碑で、この2基が南北朝期である。さらに、室町期に入るが、応永14（1407）年の塩深共葬墓地の阿弥陀三尊種子板碑がある。

終末期は、宍喰浦の願行寺の天正18（1590）年の

阿弥陀画像板碑である。阿波型板碑でも最も新しい板碑である。

3) 板碑の大きさ

海陽町の板碑の大きさの分布を図7に示した。長さについては下半部が深く埋まっている板碑については『海部町史』のデータを利用した。特徴として、小型板碑が多いことが挙げられる。

また、阿波型板碑の場合は長さと幅の比が1:2が標準的であるが、海陽町の板碑は2基の板碑はほ

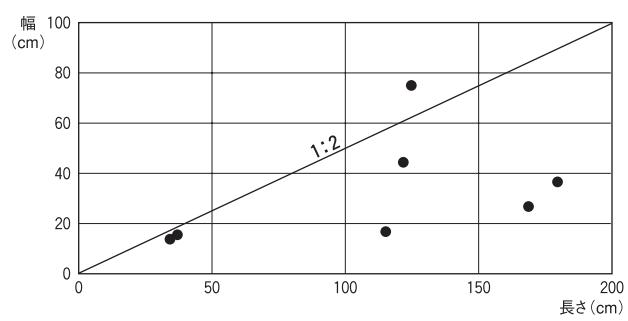


図7 海陽町の板碑の大きさ

ほそのラインにあり、あと2基もそれに近いが、あとの3基の板碑は幅が狭く、1:5に近くなっている。他と比べて、幅の狭い傾向が指摘できる。

4. 考察

1) 地蔵画像板碑

今回、2基の地蔵画像板碑と地蔵石碑1基の調査をした。1基は地蔵寺の紀年銘板碑で、明徳元(1390)年の年号を持つ砂岩製である。もう2基は、銘文を持たない砂岩製である。前者の地蔵寺の地蔵画像板碑は、地蔵寺境内の祠に建てられている。下に埋め込まれており、上半部を欠くので原寸はわからないが、現状では長さ180cm、幅36.7cm、厚さ11.8cmを測る地蔵画像板碑である。銘文として「右志者為逆修 結衆 明徳元年十月日 奉造立供養 各々敬白」とあり、明徳元(1390)年の造立である。

地蔵寺の地蔵画像板碑(図8-7)と意匠が共通すると考えられる板碑(図8参照)に、美波町西河内月輪の地蔵画像板碑がある。考古班1997でも紹介している。西河内月輪の板碑(図8-1・2)は砂岩製で、地蔵の線刻像を種子とするが、二線も枠線ももたない。1号板碑は、長さ98.0cm・幅15.0cm・厚さ6.0cmを測り、長幅比が15.3%しかない細長いものである。2号板碑は、長さ80.0cm・幅16.7cm・厚さ5.0cmを測り、長幅比は20.8%である。

次に、大山神社奉納品の地蔵画像板碑(図8-6)についてみてみる。この板碑は、長さ37.1cm、幅15.7cm、厚さ4.3cmを測る地蔵画像板碑である。砂岩製であるが、おそらく竹ヶ島産のものと考えられる。

これに共通するのが、鳴門市大麻町の宝幢寺の地蔵画像板碑(図8-3)である。この板碑は銘文を持たない砂岩製である。この砂岩も、赤茶色っぽい色を呈しており、竹ヶ島産の砂岩と考えられる。考古班2017でも紹介したが、宍喰や高知県東洋町周辺から搬入されたと考えられる。同じ板碑が高知県甲浦にもあり(図8-4・5)、竹ヶ島産の砂岩で造られた板碑が、高知県甲浦や鳴門までもたらされたことを物語っている。

2) 城満寺の石仏をめぐって

今回調査した城満寺の地蔵画像石仏であるが、前述したが、「城満寺の境内にあった墓碑が、天正の兵火に焼かれて地下に埋もれていたものであろう」と推測されている。真っ黒の碑面が焼かれた痕跡とみられるのだろうか。ただし、板碑かどうか、見解が

分かれるところである。この地蔵画像石仏は以前から町史等に石仏や石碑として紹介してきた。特に、笠井藍水が調査をして報告している。笠井は、高知県でもこのタイプの石仏の調査を行い、石仏について「板碑状のものが唯一あり、五輪塔と板碑と石仏が同時に存在することから室町時代のものとしている」⁹⁾。そして、これらを埋葬石仏としている。

近年、恩山寺の石仏が調査で発見され、これを契機に中世石仏の研究がされている。早淵・西本(2013)によると、城満寺の石仏を地蔵菩薩立像とし、重弧連文をもつ特徴があり、恩山寺の石仏と共に、さらに高知県東部の夜須町と共に通すると指摘している¹⁰⁾。

岡本(2018)では、石仏の年代について、以前は紀年銘をもつ例がなかったが、南国市田村遺跡で石臼と石仏が出土し、16世紀後半と推定されている¹¹⁾。その後、香南市夜須町西山観音寺で、文禄5(1596)年の紀年銘石仏が確認された¹²⁾。

以上から、城満寺の地蔵菩薩立像は、発見の経緯からも埋葬石仏の可能性がある。年代的には、笠井は建武年間としたが、高知県の事例等から考えて室町時代末期(16世紀末)と考えるのが妥当性が高い。

謝辞

今回の調査にあたって、地元の方々のご支援をいただいた。記して感謝したい。

塩深共葬墓地管理委員会、坂田博紀様ご夫妻、海陽町立博物館、城満寺、願行寺、地蔵寺、鯖大師

註

- 1) 田所市太1916:「阿波南方の板碑」『考古学雑誌』6卷7号 p.46
- 2) 田所市太1917:「阿波國海部郡宍喰の板碑」『考古学雑誌』7卷6号 p.30
- 3) 註2)に同じ
- 4) 郷土班1987:「石造文化財・文書類調査」
- 5) 宍喰町教育委員会1986:『宍喰町誌』上巻 p.1787
- 6) 笠井藍水1949:『下灘郷土讀本』 p.45
- 7) 海部町教育委員会1971:『海部町史』 p.345
- 8) 註7)に同じ
- 9) 笠井藍水1939:「土佐に存する『埋葬石佛』に就て」『考古学雑誌』第29卷第6号 p.398
- 10) 早淵・西本2013:「恩山寺の石仏—重層的な弧線で表現された台座をもつ石仏—」p.37
- 11) 岡本桂典2018:「土佐における中世墓の終焉から近世墓標へ」『四国地域の中世墓終焉期を探る』p.54
- 12) 岡村庄造1992:「夜須町観音寺跡の石造遺品」



図8 海陽町地蔵画像板碑と共に通する板碑（縮尺不同）

1 西河内月輪1号板碑（考古班 1997） 2 西河内月輪2号板碑（考古班 1997） 3・4 甲浦の板碑（考古班 2017）
5 宝幢寺地蔵画像板碑（考古班 2017） 6 大山神社奉納地蔵画像板碑 7 地蔵寺地蔵画像板碑（部分） 8 城満寺地蔵佛

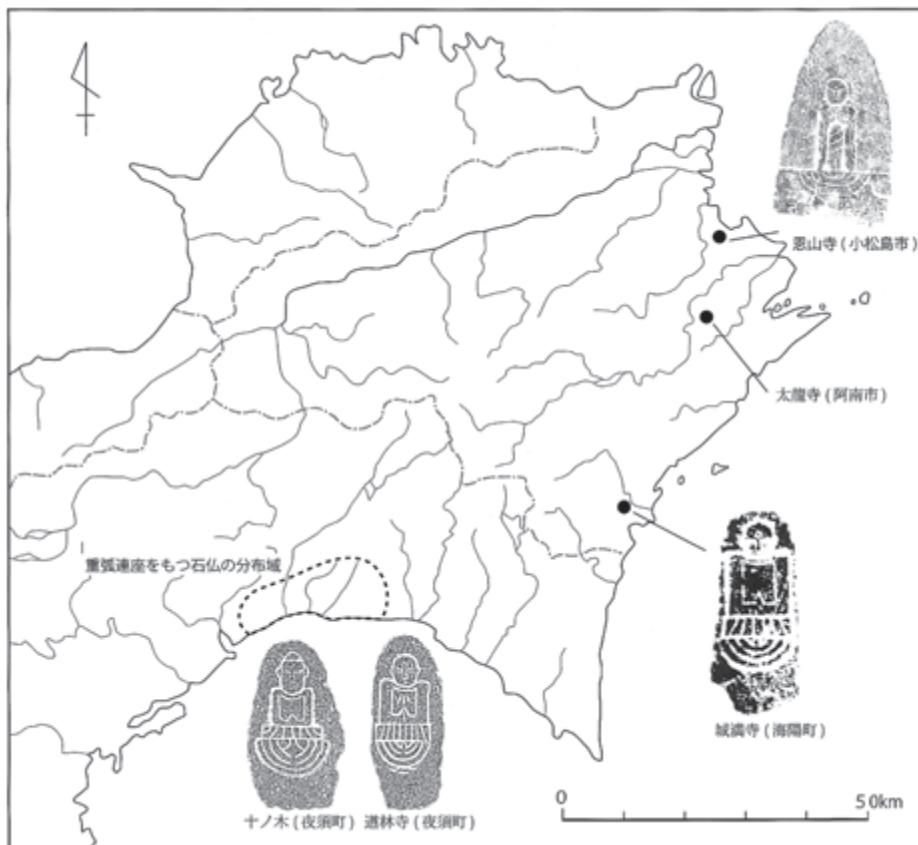


図9 重層的な弧線で表現する台座をもつ石仏の分布（早淵・西本2013より引用）

参考文献

- 石井町2004：『石井町の板碑』石井町教育委員会
 小沢国平1967：『板碑入門』隣人社
 岡村庄造1992：『夜須町觀音寺跡の石造遺品』『土佐史談』第190号、土佐史談会
 岡本桂典2018：『土佐における中世墓の終焉から近世墓標へ』『四国地域の中世墓終焉期を探る』中世葬墓制研究会
 海南町史編さん委員会1995：『海南町史』上巻、徳島県海部郡海南町
 海部郡海部町教育委員会1971：『海部町史』海部町教育委員会
 笠井藍水1927：『海部郡誌』海部郡誌刊行会
 笠井藍水1939：『土佐に存する『埋葬石佛』に就て』『考古学雑誌』第29巻第6号
 笠井藍水1949：『下灘郷土讀本』
 郷土班1987：『石造文化財・文書類調査』『郷土研究発表会紀要』33号、阿波学会

- 考古班1997「日和佐町の板碑」『総合学術調査報告日和佐町』阿波学会紀要43号
 考古班2017：『鳴門市の板碑』『総合学術調査報告 鳴門市』阿波学会紀要61号
 宍喰町教育委員会1986：『宍喰町誌』上巻・下巻
 田所市太1916：『阿波南方の板碑』『考古学雑誌』6巻7号
 田所市太1917：『阿波國海部郡宍喰の板碑』『考古学雑誌』7巻6号
 徳島県教育委員会1977：『石造文化財—徳島県文化財基礎調査報告書第1集—』
 徳島市1989：『徳島市の石造文化財』徳島市教育委員会
 服部清道1972：『板碑概説』角川書店
 早淵隆人・西本和哉2013：『恩山寺の石仏—重層的な弧線で表現された台座をもつ石仏—』『阿波遍路道 恩山寺道・立江寺道』徳島県教育委員会
 橋本幸夫1919：『海部郡川西村史』
 溝淵和幸1983：『日本の石仏2』国書刊行会

“Itabi” the flattened schist stone-monuments in Kaiyo Town, Tokushima, Japan

OKAYAMA Machiko*, NISHIMOTO Saori, KOBAYASHI Katsumi, MIYAKE Yoshiaki, IIDA Yui, NAKAGAWA Sho and FUKUDA Osahiro
 * 4-31-901, Minamisuehiro-cho, Tokushima 770-0865, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.63 (2021), pp.27-36.